雁塔聖教序

唐・653年／褚遂良（596～658）

（教科書 40～43 ページ）

概要・特徴

インドから多くの仏典を唐朝にもたらし、それらを漢文に翻訳した玄奘（三蔵法師）の功績をたたえた碑である。唐の第2代皇帝・太宗と皇太子（後の高宗）がそれぞれ「聖教序」と「聖教序記」を著し、褚遂良が書写して碑を建てた。この二つの碑を合わせて「雁塔聖教序」という。仏教のすばらしさと中国への伝来について述べた後、苦労してインドに赴き、中国に仏教を広めた玄奘の功績について書いている。二つの碑は、同型で同じ大きさの黒大理石に刻されており、陝西省西安市の慈恩寺・大雁塔内に現存する。石質がよく、塔にはめ込まれていたために、破損は少ない。

褚遂良の書の最高傑作といわれ、行書的な用筆による変化に富んだ軽快な書風である。

作者について

褚遂良（596～658）は、唐の官僚。書の名手として知られる「初唐の三大家」、「唐の四大家」の一人。字（別名）は登善で、銭塘（現在の浙江省）の出身である。堅実な人格を見込まれて太宗に仕え、優れた政治手腕を発揮し重用された。楷書や行書に巧みであっただけでなく、鑑識眼にも優れ、宮中に集められた王羲之の書跡の鑑定にも力を発揮した。太宗の没後、高宗の怒りを買って愛州（現在のベトナム北部）に左遷され、不遇の晩年を送った。楷書の他の作品に、「伊闕仏龕碑」や「孟法師碑」などがある。

時代背景

唐の第2代皇帝・太宗は、優れた文化政策を行い、国家規模で書文化の興隆に努めた。王羲之の書をこよなく愛して収集に力を注ぎ、その書を手に入れると、虞世南・欧陽詢・褚遂良（初唐の三大家）らに臨書させたり、職人に精巧な模本（複製）を作らせたりした。これらは王羲之の書を知るうえで貴重な手がかりとなっている。